



国際化の最前線から



地域で学ぶ、地域と学ぶ

～フィールド教育の新たな挑戦 ①

立命館大学先端総合学術研究科 准教授 阿部 朋恒

私はこれまで約 10 年にわたって、大学生や院生を国内外のさまざまな地域とつなぐフィールド教育に携わってきました。

フィールド教育は、ますます変化が加速する時代を生き抜くための主体的な力を養うことを目的としたもので、高等教育では 2010 年代より導入が本格化しています。ただし、その成否は学生の頑張りよりも、むしろ教師の方が教える・答えるという職業的習性をぐっと抑え込んで、黒子に徹していただけるかどうかにかかっているようです。

教室の外に出ると、私は「何ですか?」「なぜですか?」「どうしたらいいですか?」といった声には耳を塞ぎます。できるだけ答えをはぐらかし続け、どうやらコイツは頼りにならないぞと見限られる頃になってようやく、学生の主体性が躍動しはじめるからです。正しい問いの立て方も答えも用意されていないことに気づき、自由な発想に火をつけることができた学生は、たった数日で見違えるほどの成長を見せてくれます。

とはいえ皮肉なことに、教員としてそれを見守ることに難しさがあります。とりわけ新型コロナウイルス感染症の流行以降、教育現場でも監査文化 (audit culture:

説明責任の遂行や手続きの一貫性・透明性を是とする倫理的傾向) は浸透の度合いを深めており、何事も計画通りに事を運ぶことが求められるようになってい



中国雲南省にて少数民族のハニ族から棚田での複合農業について学ぶ大阪大学の学生たち

ます。しかし、フィールドでの偶然の出会いから引き出される学生の自発性に寄り添おうとすればするほど、シラバスに掲げた計画と目標は絵に描いた餅になっていきます。畢竟、教員にできるのは、このジレンマを受け、どうにか取り繕うべく奔走するくらいが関の山なのですが、それすらも並ならぬ覚悟と労力を注がねば成し得ないのが現状なのです。

以上を整理すれば、フィールド教育の最前線に横たわる課題として、①教える立場から降りて導く教育法、そして②予測不可能性を肯定的に許容する評価システムの二つが不足していることが指摘できます。

次号では、地域連携を組み合わせたフィールド教育の事例を紹介しつつ、これらの課題を乗り越える展望を提示していきます。

プロフィール

阿部 朋恒 (あべ ともひさ)

首都大学東京大学院人文科学研究科社会人類学教室 博士後期課程修了。博士 (社会人類学)。研究地域は中国雲南省、チベット文化圏など。

現在は、京都の山間集落に移住し、住人としてその地域に関わりながら「地域で学ぶ・地域と学ぶ」フィールド教育を実践中。

共著書に「世界遺産を支える『文化』の諸相——中国雲南省における『紅河ハニ棚田群の文化的景観』の世界遺産登録をめぐる」、飯田卓編『文化遺産と生きる』(臨川書店) などがある。



京都市北区山間地域小野郷学区にて農具を手に休耕地の再生に取り組む中国・南京大学の学生たち